

# デグーの千夜一夜物語

## 第四夜 お金の起源



### 1 お金は異世界への窓口だった

西太平洋にばかりと浮かぶヤップ島。

この島には大きな石で作られたお金、「フェイ」がある。

フェイとはヤップ島から 500 km 離れているバベルタオブ島で切り出されたもので、大きければ大きい程、

粒子が細かい程、石灰石で白く美しい程、価値は高い。

価値が高いフェイほど持ち運びにくいので、

ヤップ島に持ってくるだけでもたくさんのお話ができる。

今日も村人は、フェイにまつわる話で盛り上がっていた。

「あの家にあるフェイは、幾度も海に洗みかけた。三人の命が犠牲になったが、嵐の中、とても勇敢だったそうだ」

「あいつの家こそ村一番の金持ちだ。なにせ、海底にたいそう立派なフェイが洗んでいるらしいぞ。誰も見たことがないなんて、それこそ伝説に相応しいフェイだ！」

ある時、アイルランドで傷害事件を起こした男が、

海へと逃げ出し、偶然ヤップ島を見つけた。

彼はこの島でのお金がなんであるかを知ると、

すぐさま西洋式の頑丈な船でバベルタオブ島へと向かい、

ヤップ島へ大きなフェイを何個も持って持ってきた。

男は、一夜にしてヤップ島の億万長者になったのだ。

ところが、男の持ってきたフェイは、そのうちに島民の持っ

たフェイよりも、みるみる価値が下がっていった。

不思議に思った男は、島民たちに聞いてみた。

「なぜ俺のフェイを低く見積もるのだ？」

島民は答えた。

「だって、大きくて美しいだけだから」



エジプトのシーシャ屋へ行くと、若者達が「バックギャモン」というボードゲームをしている姿をよく見ます。このゲームは古代エジプトから行われており、ピラミッドの壁画にも描かれているそうです。そして日本にも飛鳥時代（6世紀～）に入ってきて、「双六（すごろく）」へと変化し、賭け事のゲームとして大流行しました。その熱狂ぶりは凄まじく、飛鳥時代に三度も双六禁止令が出されたほどです。

とはいえ、単純にお金目的の賭け事だったのかは議論が分かれています。なぜなら、当時の賭けとは、**神様にどちらが正しいかを問うことでもあったから**です。つまり、勝った方は運の女神が支持してくれたということですね。実際、賭けのチップとして使われた日本最古の貨幣である「富本銭」は、**モノを買うためには全然使われていなかった**そうです。

そもそも、貨幣の幣（ぬさ）とは「神への捧げもの」という意味でした。何にでも交換できるという力によって、**異界との仲立ちもできる**と考えたのでしょう。そのためか、富本銭も当初はお寺をたてる場所にまじないとして置かれたり、別の貨幣では、三途の川を渡るための運賃として、死者と一緒に埋葬したりして使われていました。

そして、この歴史的な事実によって、未だに続く大論争が勃発したのです。

## 2 お金は物々交換から生まれた

どうしてお金は生まれたのでしょうか？単純に考えてみましょう。原始社会では物々交換をしていたとします。魚を取ってきたAはBの持っている牛と交換したいのですが、Bがいつも都合よく魚を欲しがらるわけではありません。どうしようかとAが迷っているうちに魚は腐ってしまいました。

つまり、交換にはAとBの「**欲求の二重の一致**」が必要なのですね。そこで、いつでも交換できるように保存が効き、**誰もが欲しがらるモノを先回りして交換するようになります**。たとえば歴史的にはそれが塩でした。ローマ時代には兵士に塩（Sal）を給料として払っていたのです（サラリーマンの語源）。塩というお金が誕生したのですね。

以上のお金の起源説は、「**商品貨幣論**」と呼ばれており、主流派経済学の教科書でも書かれています。「**数ある商品の中から、お金になるものが選ばれる**」というロジックですね。お金の定義とは、「**なんでも交換でき、それで価格を表示し、腐らず貯めこめること**」です。貨幣に金属が選ばれるようになったのは、重さで価格が表示でき（イギリスの価格表示「ポンド」は、今でも重量単位でもある）、腐らず、形を自由に変えられるからです。金属が多く手に入ると「**鑄造貨幣**」と呼ばれるコインがたくさん作られるようになりました。

以上の説明は非常に説得力があります。しかしながら、日本では最初の貨幣は交換に使われていないという話でした。そして、多くの人類学者が世界中を探してみたところ、**そもそも物々交換をしている共同体なんて、どこにも見つからなかったのです**。

## 3 お金は信用から生まれた



冒頭に挙げた「**フェイ**」は商品貨幣論を揺るがしました。アニメでは原始人が大きい石のお金を転がして使ったりしている様子が描かれたりしています。時には、その重さに嫌気がさす描写をし、「原始人はバカだなあ」と笑いどころになったりします。

もちろんヤップ島の住民はそんなバカではありません。彼らは**フェイを実際には交換しないのです**。「Aからはウチのフェイ一枚分の畑を買った、でもBにはウチのフェイ一枚分の船を売った。だからAの支払いはBにしてもらおう」。このように**ツケ払い同士を合わせて相殺することによって**、フェイを支払わなくて済むようになります。これを島民全体で上手いこと調整して、**誰もフェイを交換しないで済むように買い物をするのです**。だから誰も見たことのない海に沈んだフェイでも使えるのですね。

こうした事例は世界各地にあり、ある学者たちは商品貨幣論とは別の起源を考えました。物々交換では直接その場で交換することが前提でしたが、実際には人類は「**いつか支払いますよ**」という信用で交換をしている例が圧倒的ではないかと。まずはそういう**信用があり、それを計算しやすくするためにお金という統一基準が作られたのだ**。だから極論、**お金は商品価値が全くないものでも良い**というのです。この発想は、私たちには実によくなじみます。なぜなら、ただの紙切れが「一万円」として通用している社会に、私たちは生きているからです。

#### 4 貨幣の起源は経済政策の違いへ

こうして貨幣の起源説には二つの解釈が生まれました。商品貨幣論と「**信用貨幣論**」です。前者は元々価値のあった商品が貨幣になったというもの。後者は貸し借りをした信用関係を具現化したものです。つまり、**物が先か、概念が先か**というのでお互い論争をし続けているわけですね。そして面白いことに、この起源の違いが、なんと現代の金融政策論の違いになってくるのです。

商品貨幣論では、物が先なので、物がたくさん溢ればその物の価値は下がります。お金も同じで、たくさん発行すればお金という商品の価値は下がるので、お金を安く借りる（金利が低い）ことができますようになります。すると多くの企業がお金を借りやすくなり、様々な事業を行うようになって景気が良くなる。それが現在の日銀が行っている**異次元緩和**という経済政策です。

一方で、貨幣が負債（信用）である、と考える信用貨幣論では、**お金とは借用書です**。近代では、**国が金や銀の借用書（ツケ払い）として発行したものが貨幣**なので、一万円分の金の引換券が一万円札となります。いつでも金と引き換えますよという証明書なので、国の「負債」です。**国が負債を負って借用書を発行しないと、そもそも貨幣が出回らないし、民間人は貨幣を貯蓄できません**。逆に、政府は公共事業などを行って借用書（借金）を増やすと景気が良くなります。つまり、国が民間のために仕事を作って需要を作り出せということですね。

以上のことから、よく**商品貨幣論は供給の論理、信用貨幣論は需要の論理**と言われたりします。

#### 5 仮想通貨というならば

しかしながら、もう一度フェイの話を思い返すと、そこには供給でも需要でもない論理があったようにも思えます。それはフェイの価値には「**物語**」が大きく関係していたということです。

貨幣の特徴の一つに**無人格性**、つまり**どの一万円札も同じ**というものがあります。だから気兼ねなく、何にでも交換できるのですが、フェイの事例は、本当にそれで価値の「統一基準」なんてものができるのかと問いかけています。

たとえば、子どもはボロボロのぬいぐるみを宝物のように大事にしています。統一基準である貨幣で換算したら、一円の価値もないものでしょう。しかしながら、そのぬいぐるみには子どもとの「**物語（思い出）**」があるので、彼（女）にとっては価値があるのです。それは主観的な価値かもしれませんが、フェイでは、その価値こそを島民全員が重んじていました。

彼らが教えてくれるように、物語や異世界との繋がりなど、多様な価値世界を貨幣はほんらい表現できます。いまは仮想通貨が流行っていますが、仮想通貨というならば、こういう仮想世界との繋がりも取り戻してほしいですね。

(3)



文責： 田井 勝

